制度に頼るのではなく、地域で助け合う

共生型デイサービス「52 間の縁側」

人生の終わりに向うとき、その人を取り巻く環境とは、どんなものであったら良いのか

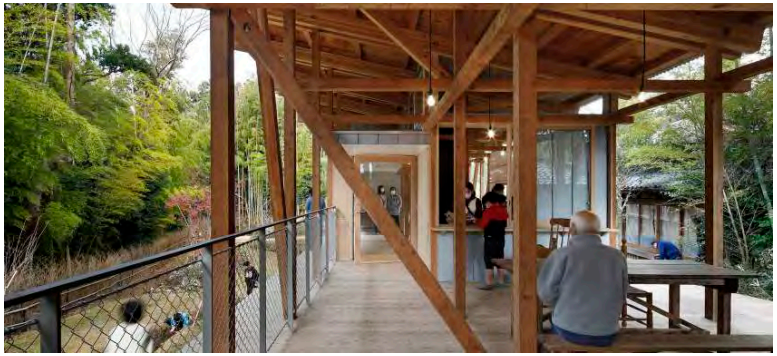
街から離れ、**外から見えない**福祉施設。
同じ状況（介護度）の**同質の人たちといつも過ごす**ことを強要される。
入浴、排泄、食事は決まり切ったサービス（介助）のルーティン。
認知症の親が家へ戻ってきたときの負担とストレスと大きな落胆。
「老々介護」
「閉じ込められる」徘徊
認知症から家族をまもる薬と身体拘束

認知症になったら、介助が必要になったら、いつまでも消えない不安を私たちはどう乗り越えることができるのだろうか。これが「５２間の縁側」という建築で考えたことです。

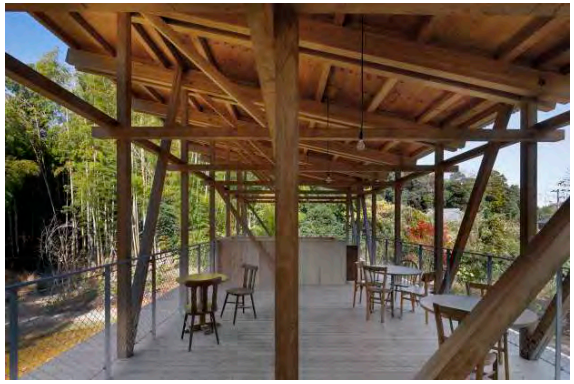
■認知症や介助が必要な高齢者が過ごすが、庭には近所の子供たちも気軽に訪れ、利用者に**懐かしい日常**を与えてくれている。

懐かしい日常のある福祉「施設」

事業主の石井さんは、認知症などシリアスな問題を抱えていたとしても、ありのままその人らしい日常の暮らしを送れることをポリシーとして１５年間介護事業を営んできた。最大の特徴は、利用者である高齢者だけでなく、赤ちゃんから子ども、障がい者や家族、外国人を交えた「ごちゃ混ぜケア」を実践してきたことである。この計画では、石井さんの「ごちゃ混ぜケア」が地域と結びつき、懐かしさを感じる日常の風景が生まれている。認知症や障害があっても、さらに言えば年老いていくことが、日常と切り離されずに過ごしていけるような環境の実現を目指して計画された。



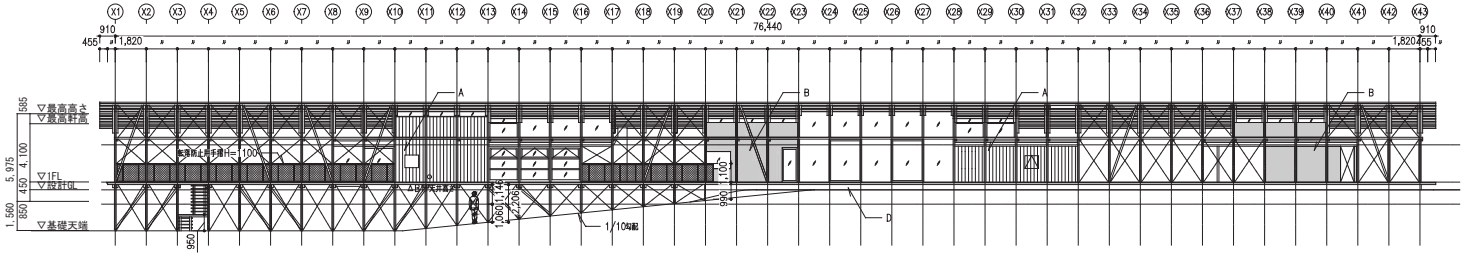
■カフェや寺子屋、デイサービス、公衆浴場
といった様々な人々が行き交う「**まち**」のような建築



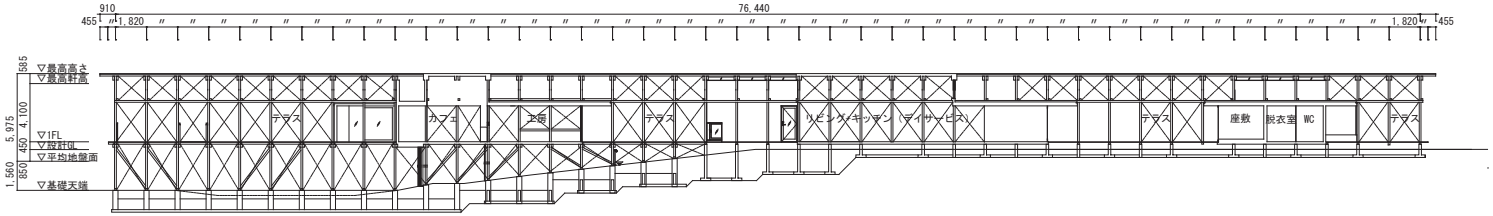
活動をつなぐ橋のような架構について

上部構造は 105 × 105 の柱断面による木軸フレームを長辺方向に対して 1.82 m ピッチで連続的に配し、屋根庇のはね出しは、2 本の 105 × 240 の梁が柱断面を挟みこむ構成としている。また中間梁と柱は三方から取り合うため、各々の部材断面を切断しない簡易な方法としビスによって接合している。耐震要素は適材適所に、合板、105 × 105 の筋交い、既製品による引張ブレースを採用し、屋根からの水平力がスムーズに伝達できるように部材配置を行っている。各接合部はアラワシであるが、筋交いや柱脚接合部など部材端部同士の接合部は鋼板挿入によるドリフトピン形式とし、見え方を配慮した簡易な仕様で耐力を確保している。

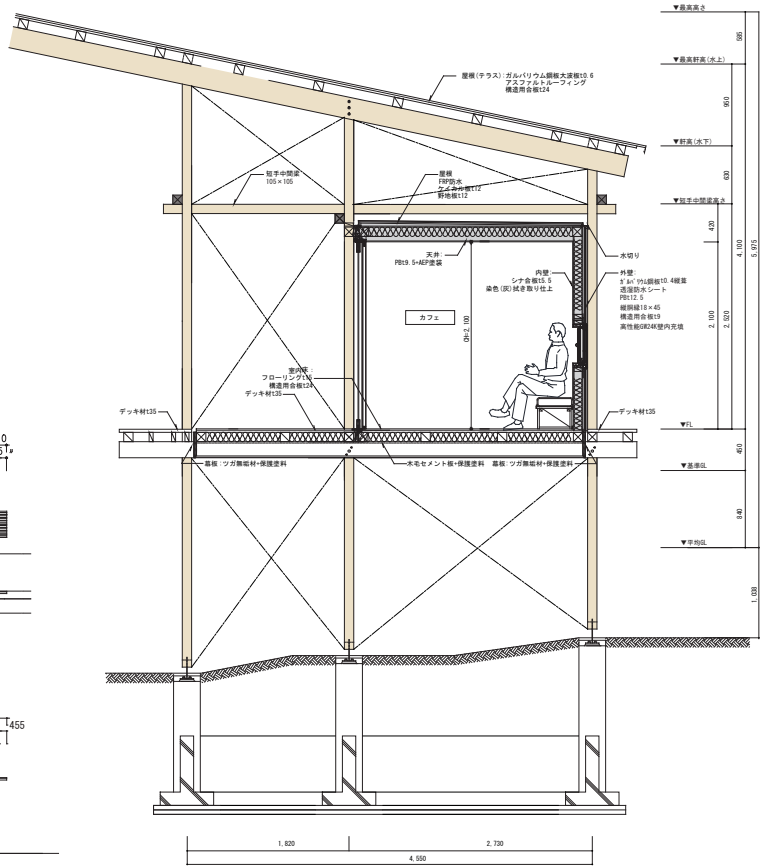
■様々なアクセスのある地域と施設をつなぐ縁側。
みんなで過ごす地域の縁側。誰もが佇める**一人一人**の縁側。



■西立面図　S=1:300



■長手断面図　S=1:300



■構造詳細図　S=1:60